２０１５／１１／２２　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：七つのラッパが吹かれる４――強い御使いのさばき
聖書箇所：ヨハネの黙示録　１０章１－１１節

どうぞヨハネの黙示録１０章をお開きください。
私たちは９章の中で第六のラッパが吹き鳴らされ、神様のさばきが下ったことを見ました。そして最後の第七のラッパが吹かれる前に小休止があります。ちょうど括弧の中に包まれているようです。その箇所がきょう私たちが見て行く１０：１のところであり、１１：１４までそれが続きます。そしてその後、最後のラッパが吹かれるわけです。
黙示録の中を見た時に、ちょうど封印が解かれる時もそうでした。第六番目の封印が解かれ、第七番目の封印が解かれる間に少しの小休止がありました。またこの後１６章に“鉢のさばき”、器が壊されるさばきが出て来ますけれども、そこでも第六番目と第七番目の“鉢のさばき”の間にわずかな小休止があります。なぜこういう小休止があるのか――。一つは、これまでに示された出来事を人々が消化するために、考える時間を与えてくれているのです。
また同時に、世界じゅうにいろいろなことが起こるわけです。この黙示録を学び始めて世界的なレベルで自然界に大変なわざわいが下ることを見て来ました。第六のラッパが吹き鳴らされた時に、世界の人口の三分の一が滅んでしまうと記されていました。そういったニュースが毎日のようにヘッドラインを飾るわけです。そういうニュースが世界じゅうを駆け巡って、「この世は一体どうなってしまうのだろう」ということが人々の間で語られるようになる。しかも一日、二日の話ではありません。３年以上、そういう大変な時代が続くのです。多くのクリスチャンたちは確かに神様によって守られています。でも彼らもこの世界がどうなって行くのかと、いろいろな面で不安になります。今でも多くのクリスチャンたちがいろいろなことで不安を抱えているかもしれない。そこで神様はこういう小休止を与えるのです。確かにいろいろなことが起こっているし、信じられないようなことが世界的に起こっているけれども、再びクリスチャンたちに対して、「心配することはない。すべては私の御手のうちにあり、私のみこころ、私の計画がなされているのだ」と。どんな時でも神がともにいてくださり、どんな時でも神が守り支えてくださるというのは、信者たちにとっては大きな慰めであり、励ましです。それを与えてくれるのです。
先ほどもお話ししたように、三つ出て来る小休止の中で、１０：１から１１：１４までと、この箇所が一番長いです。第六のラッパと第七のラッパの間にこの小休止が入っているわけです。ちょうど第六番目の封印が解かれ、第七番目の封印が解かれる前に二つの幻があったように、ヨハネははここで１０章の初めから１１：１３までに示される二つの幻を見ます。一つはきょう見て行く１０章「小さな巻き物を持った天使」の話です。そして二つ目は「ふたりの証人」の話が１１章の初めから出て来ます。きょうと次回でこの二つの幻を見て行きたいと思います。

☆　小さな巻き物を持った天使　１０：１－１１

まず第一番目の幻は１０章の中です。

１．「強い天使」　１－２ａ節

「**ひとりの強い御使い**」、天使についてヨハネが教えてくれることを見て行きたいと思います。
まず１節「**また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、**」とあります。この箇所は、ひとりの強い天使について私たちに教えてくれます。ヨハネはこの強い天使が地上に降りて来る様子を見て、ここに記しています。１節は「**また私は、……見た。**」で始まっています。今までに何度も見て来たように、ヨハネが新しい幻を見るたびにこのような書き方をしています。彼は新しい幻を見るわけです。

<u>「ひとりの強い御使い」が「主イエス」ではない理由</u>

当然私たちはこの下って来る「**強い御使い**」が一体だれなのかということを考えるわけです。そして、この後この天使がどういう天使なのかについての説明が出て来ます。それを見ると、非常にイエス様に似た説明がされていますが、最初に結論を言うと、これは主イエス・キリストではありません。なぜか――。今からその理由を挙げます。

（１）　主イエスのことを「天使」と呼んでいない。　創世記１６：７

まず、このひとりの強い天使がイエス様ではない理由の一つ目は、主イエス・キリストは新約聖書の中において天使とは呼ばれていないということです。確かに肉体を持ってこの世にお生まれになる以前、旧約聖書の時代には「**主の使い**」と呼ばれていました。主イエス・キリストが何度か地上に来られている

様子が記されています。一般的に言われるクリスマス、イエス・キリストの誕生をもってイエスがこの世に存在するようになったのではありません。主イエス・キリストは永遠から永遠に存在されている。ただ肉体を持ってお見えになった、それが一般的に言われているクリスマスです。イエス様は永遠から永遠に存在されているわけで、肉体を持つ前も存在されていた。そのイエス様がこの地上に来られた時には、「**主の使い**」と呼ばれています。旧約聖書には確かにそのことが出て来ます。例えば創世記１６：７にそのように記されています。しかし、それは旧約の話であって、新約聖書のどこを見てもイエス様のことを「御使い」、「天使」と呼んでいるところはありません。ですからここに「**もうひとりの強い御使い**」と記されているので、これがイエス・キリストではないというのが一つ目の理由です。

（２）「天から降りて来る」

二つ目の理由は、この天使が地上に「**天から降りて来る**」のです。主イエス・キリストは確かにこの地上に帰って来られます。目的はこの地上に千年、神の王国を築くためです。もしこれがイエス様だとしたら、イエス様は帰って来られてまた天に上がられて、また地上に帰って来て千年王国を造ることになります。聖書の教えから見るならばそれも違うと。

（３）主イエスは「誓う」はない　１０：５、６

三つ目の理由として考えられることは、この「**もうひとりの強い**」天使は５、６節を見ると、神に対して誓いをなしています。イエス様はそんなことをなさらない。

ですから、この天使は確かにイエス様によく似ているのですが、主ではないということが言えます。

<u>天から降りて来る天使について</u>

さて、この天使について少し見て行きましょう。

（１）ラッパを吹き鳴らす７名の天使たちとは異なる天使

まず「**もうひとりの強い御使いが**」と書いてあります。この「**もうひとり**」という形容詞は何度も出て来ました。７：２にも８：３にも出て来ました。ここで使われているギリシャ語は、本質的には同じでありながら別のものという意味を持った形容詞、「アロス」ということばが使われています。ということはこの「**もうひとりの御使い**」と言うと、このラッパを吹いた御使いたちとは同じ天使でありながら、全く別の天使であるということです。ですからもうひとりの御使いと記されているのは、ラッパを吹いていた天使たちとは違うという話です。正直なところだれかわからないのです。ただこの黙示録と旧約聖書のダニエル書というのは非常に関連しています。ダニエル書の中にはふたりの強い御使いたちが出て来ます。ひとりはガブリエルであり、もうひとりはミカエルです。ですからひょっとしたらそのどちらかであった可能性があります。でもこうなって行くともう推測になってしまいます。ですから我々はもうそこでとどめなければいけない。ある「**ひとりの強い御使い**」が天から降りて来たのだと。

（２）　雲に包まれている

そしてこの天使に関して、彼は「**雲に包まれて**」と続きます。これはヨハネが見た幻です。降りて来るひとりの天使について彼はこのように見るわけです。「**雲に包まれ**」るというのは、権力や威厳、栄光を表します。神の栄光が満たされた時にその一帯は雲で覆われた。そういうところから我々は「**雲**」というのを見ると、栄光を思います。また、この天使はどうもさばきにかかわる働きをするようです。「**雲**」ということばは新約聖書の中に２５回出て来ますが、そのうち９回はさばきの場面に出て来る、それと関連して使われています。どんなふうにかというと、キリストがさばきを下すために「**天の雲に乗って来**」られると書かれています。イエス様が天の雲に乗って来られる目的はさばきを下すためです。ですから「**雲**」というと栄光だけではない。さばきとも関連しているわけです。この天使は非常な力を持ち、また権威を持ち、さばきを下される、さばきにかかわる天使であったと言えます。

（３）　頭上には虹がある　創世記９：１６

三つ目は「**頭上には虹があ**」ると書いてあります。この「**虹**」というのは、４：３にも出て来ました。神様の「**御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。**」と書いてありました。そこで我々が既に学んだように、それは神様の恵みとあわれみを象徴していると。「**虹**」というと、我々はあのノアの箱舟の話を思い出します。洪水があって全世界が滅んでしまった後、神は虹をお造りになった。それはもう洪水をもって人類を滅ぼさないという神様の約束でした。「**すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約**」を神様は結ばれた。それが「**虹**」でした。ですから確かに「**虹**」を見ると、そこに神様のすばらしい「**契約**」、約束というものを我々は覚えるわけです。神は私たちをあわれんでくださり、もう洪水をもって私たちを滅ぼすことはない。「**虹**」は私たちにそういう約束を思い起こさせます。

また同時に、この「**虹**」ということばは「ケセット」というヘブライ語が使われるのですが、旧約聖書の中にはこのことばが７７回出て来ます。そのうちの４カ所だけ「**虹**」と訳しています。残ったところは１カ所を除いてすべて「弓」か「矢」と訳されています。つまり武器です。例えばあのイサクが歳を重ねて肉が食べたくなったので、自分の息子エサウに対して「**おまえの道具の矢筒と弓を取って、野に出**

て行き、私のために獲物をしとめて来てくれないか。」（創世記２７：３）と願います。その中で、「**弓を取って**」の「**弓**」が今見ている「**虹**」と同じヘブライ語です。この「**虹**」ということばは、神様のあわれみや神の恵みとともに神様のさばきを表すのです。私たちはこれから先大変な神様からのさばきが下ることを見ています。そして、この天使が確実にさばきに関わっていると。必ずさばきが起こるのだと。しかしそれでいてこの「**虹**」ということばは神のあわれみを示すのです。

つまり、聖書が教えるすべてのものをお造りになった創造主なる神は、何一つ罪のないきよいお方であって、どんな罪でも憎んでおられる。ですから、最初から罪に対するさばきを下すという警告をずっと人類に対して発しておられた。しかしそれでいて神は、罪人が自分の罪を悔い改めて救いを求めて来るならば救いを与えてくださるあわれみ深いお方です。私たちはこの天使を通してもまた新たにそのことを教えられるわけです。

（４）　顔は太陽のようである

もう一度テキストに戻ると、この「**ひとりの強い御使い**」に関して、第４番目「**顔は太陽のようであ**」ると出て来ます。この「**ひとりの強い御使い**」は神様の栄光を反映させて、まさに太陽のようにその顔が輝いていると記しています。黙示録１８：１を見ると、「**この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。**」とあります。神はご自身の持っておられる栄光を輝かせます。この天使たちはその神様のすばらしい栄光を反映させています。もっと言えば我々クリスチャンも同じです。私たちも栄光から栄光へと主の栄光を反映させながら、神様がどんなにすばらしいお方であるかということを示しながら生きているわけです。天使たちもそうです。彼らは被造物ですけれども、創造主なる神の栄光を現わしながら、まさに「**太陽のよう**」に神の栄光を現わしながら歩んでいる存在であると。

（５）　足は火の柱のようである

第５番目に出て来るのは、「**その足は火の柱のようであった。**」と。「**火**」というのは神様のさばきを表わします。この天使は悪をその足でもって踏みつけて行く、悪をさばく存在であると説明がなされています。

（６）　手には開かれた小さな巻き物を持っていた

そして「**その手には開かれた小さな巻き物を持**」っていると書かれています。この「**小さな巻き物**」とは一体何かといろいろな議論がなされています。確かに５：１で「**巻き物**」の話を見て来ました。七つの封印がされた巻き物の話です。ある人たちは二つは全く異なるものだと言います。封印がされていた「**巻き物**」が主イエス・キリストによって一つずつ、七つの封印が解かれた様子を見て来ました。１０章になると、「**小さな巻き物**」と書いてあります。ですからひょっとしたら開かれた「**巻き物**」の一部が書かれているのではないかとか、ひょっとしたらこれから示される啓示が書かれているのが、この「**小さな巻き物**」ではないかと。私たちはこれは恐らく同じものだと考えます。

一つだけ理由を言うと、１０：８の最後で「**開かれた巻き物を受け取りなさい。**」と天使が命じ、９節「**それで、私は御使いのところに行って、『その小さな巻き物を下さい。』と言った。**」と出て来ます。ことばは違いますが、同じものを指しています。８節で「**受け取りなさい**」と言われて彼は御使いのところに行って、その巻き物と言わずに「**その小さな巻き物を下さい**」と。ですからどうも同じ物ではないかと。

ではなぜ「**小さ**」いということばを使っているかというと、この後ヨハネがその「**小さな巻き物**」を食べるのです。それにふさわしいサイズということで「**小さ**」いとされているのではないかと。

いずれにしろそこには神のメッセージが記されているわけです。そしてこの巻き物は「**開かれた小さな巻き物**」と記しています。この「**開かれた**」という動詞の時制は完了形で、もう既に開かれており、今も継続して開かれているという意味です。ですから先ほども触れたように、恐らく５：１で七つの封印が押されていたその「**巻き物**」は開かれました。そしてここで言われているのは、もう既に開かれた「**巻き物**」、「**小さな巻き物**」です。ですから恐らくこれは同じ物を指しているのだろうと。

（７）　右足は海の上に、左足は地の上に置いている　詩篇２４：１（詩篇５０：１２、Ｉコリント１０：２６）

最後７番目に出て来るのが、２節の終わり「**右足は海の上に、左足は地の上に置き、**」と書いてあります。両足が海と地にまたがった様子をヨハネが見るわけです。つまりこれは膨大な大きさを意味しています。もっと言えば、この世界のすべてのものを支配しているということです。また神様のさばきが世界の一部ではなくて全世界に及ぶことを天使が示しているのです。そしてそのさばきが及ぶことによって、今は一時的に神の敵であるサタンがこの世界を支配しています。でもいつまでも続くわけではありません。主はそれに勝利なさり、すべては主の元に戻されるわけです。

こうして七つの説明をもってこの強い天使の説明がされています。最初にもお話ししたように、こうして見た時に非常にイエス様に似ているということは確かです。ですからこの強い御使いというのが主

イエス・キリストを指しているのではないかという説が出るのはうなずけます。でも最初にお話しした理由で、これは主イエスではなくて、ひとりの神様の役目を受けて働きをなした天使であると考えるわけです。

２.「その行動」　３節

　ではその天使がどんなことをするのか、その行動を見て行きましょう。

１）「ししがほえる時のように大声で叫んだ」　アモス３：８

　３節「**ししがほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した。**」と、まずこの天使がしたことは「**ししがほえるときのように大声で叫んだ**」とあります。大声で何かを言うというのは、自分の言うことを聞いてもらいたかったり、また相手に注意を払ってもらうためです。恐らくこの天使もこれから彼が言うことを強調していたのです。また彼が言うことを聞く対象がしっかりと注意を払って聞くようにという意味で大きな声で叫んだのです。ライオンがほえるという表現がされています。動物園に行って、ライオンがどんなうなり声を上げていようと私たちは余り恐怖心を抱きませんけれども、もし我々がアフリカのサバンナにいて、ライオンがいる地域にいたとしたら、うなり声を聞いたら我々は目を覚まして周りを見渡して注意を払います。まさにそういう様子です。ここれからこの天使の語るメッセージが私たちに教えていること、もっと言えば患難時代に生きている人たちに教えていることはいい加減に聞くのではなくて、注意深く聞かなければならないということです

２）「彼が叫んだ時、七つの雷がおのおの声をだした」

　この御使いがこのように大声で叫んだ時、「**七つの雷がおのおの声を出した。**」とあります。これは父なる神様の話です。主イエス・キリストに父なる神様がお話になった時の様子がヨハネの福音書１２章に出て来ます。イエス様が「**父よ。御名の栄光を現わしてください。**」と言われた時に、天からこのような声がしたとヨハネ１２：２８が言います。「**わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。**」と。こうしてここで父なる神がどんなことをイエスに伝えたのか、ちゃんと見てわかります。でもその時にいた人々はそうではなかったようです。２９節に「**そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。**」と続きます。今私たちはその時に起こったことをこうして活字で見て、内容を正しく理解することができる。でもその場にいた人々は父なる神がイエス様に語った内容を聞いた時に、内容がわからなくて雷が鳴ったのかと思ったのです。雷というのはさばきにおける父なる神の声によく似ています。

　例えば詩篇１８：１３に「**主は天に雷鳴を響かせ、いと高き方は御声を発せられた。雹、そして、火の炭。**」と続きます。さばきの話です。またイザヤ２９：６では「**万軍の主は、雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって、あなたを訪れる。**」とあります。そこに雷の話が出て来ます。ですから、この３節のところで、「**七つの雷がおのおの声を出した**」というのは父なる神様が声を発せられたと見ることができます。

３.「ヨハネへの禁止命令」　４節

　これだけ見ていると何を言ったかわかりませんが、次、４節を見ると、「**七つの雷が語ったとき、私**（ヨハネは）**は書き留めようとした。**」と書いてあります。ですからこの七つの雷が語った時に、ヨハネには語られた内容が理解できたのです。わかっていなかったら書き留めることはできません。そこで彼はこれまでと同じようにそれを書き写そうとすると、ヨハネに対する禁止の命令がこの４節に続きます。「**七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があって、『七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな。』と言うのを聞いた。**」。「**書き留め**」てはならないという命令が与えられたのです。言ったことは封じておきなさい、それは秘めておきなさいと。その理由はよくわかりません。ただ言えることは神がそのように定められたということです。知らすべきでないとして、これを書き留めてはならないと命じたわけです。

４.「天使の誓い」　５－７節

　５－７節は「**ひとりの強い御使い**」の誓いが出て来ます。この天使は神に対して誓いを立てるのです。５節「**それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、**」、今見て来た「**強い御使い**」の話です。「**右手を天に上げて、10:6 永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。**」と。天を指して、神を指して誓いをなしたと書かれています。これは何も珍しい姿勢ではありません。人々はこういう姿勢で誓いを行なっているのです。例えばダニエル１２：７にも「**その右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方をさして誓って言った。**」と記されています。このような姿勢で誓いをなしたということです。

　さて、姿勢はわかりましたが、この「誓い」ということばを考えると、何か「こういうふうなことをします」と、自分の決心を誓っているように見えますが、ここに言われている「誓い」というのは、天使が何かをしますと父なる神に誓っているのではなくて、神に誓うことによって、自分の言うことが真実であることを保証しようとしているのです。ここで天使がしたのは、こういうことを私がしますと言

ったのではなくて、これから私が語る内容が真実だと言っているのです。
　例えば私たちも「神に誓って」ということばをよく聞いたりします。それはこれから言うことが真実だということを伝えたいわけです。神に誓って言います、私の言うことが真実だと。この天使は自分の願い事を神に伝えようとしたのではないのです。彼は、これから語ることが真実だということを伝えようとするのです。マッカーサー先生は「この誓いは天使が言わんとすることが最も重要であり、真実であることを示している」と言われます。これから語ることが最も重要なことであり、また真実であること、それがこの天使が父なる神を指して誓うと言ったことであり、そのメッセージがこの後に出て来るわけです。

１）　天使が誓った神：その神についての説明　６ａ節

　そのメッセージを見る前に、この誓いをした神がどういう方なのか、その説明がなされています。あなたや私の神がどういう神なのか書いてあります。「**永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方**」であると。すばらしい定義です。私たちの神は、人間によって造られたものではありません。また人間が神になるのでもありません。動物でもありません。人間が作った像でもありません。聖書の教える神は永遠から永遠に存在しておられる方、この方によってすべてのものが造られた。６節はそのことを私たちに教えてくれます。永遠なる神がこの自然界のすべてのもの、そしてあなたや私を創造してくださった。

２）　誓いの内容　６ｂ―７節

　さて、誓いの内容はどういうものか――。正確に言えばどんな重要なメッセージをこの天使は語ろうとしているのか――。

・「もはや時が延ばされることはない。」

　６節後半「**もはや時が延ばされることはない。**」と。この天使が最初に何を言ったかというと、時間がすべて経過し、もはや延期されることはない。つまり、主が約束されたことが今まさに起ころうとしているという話です。約束されている七つ目のラッパが予定通り吹かれるという話です。もうその時が来たのだというメッセージです。もうこれから遅れることはないのだ。まさにもうそれが起ころうとしているのだと。それがこの６節の後半にあるもう時が「**延ばされることはない。**」、その時が来たというメッセージです。それを天使が語るのです。

・「その日には」

　次の７節「**第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には**」とあります。つまり最後のラッパが吹かれるその時の話です。「**その日**」と言うと一日を連想します。この「**日**」という名詞は実は単数形ではなくて複数形が使われています。「**その日**」よりも「その日々」です。つまり、ある一定の期間がそこにあるという話です。なぜかというと、最後の第七のラッパが吹かれた後、鉢のさばきが下るからです。七つの鉢のさばきが続きます。ですから一日に起こる出来事ではないのです。ある一定の期間、このような最後のさばきが地上に起こるという話です。それがこの７節の中でみことばが私たちに教えることです。

・「神の奥義」

　ではその時はどうなるかというと、「**神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。**」と。「**神様の奥義**」というのは隠されていた神様の真理の話です。旧約の時代において、神様は預言者たちに「**神様の奥義**」をたくさんお語りになりました。多くの人々はそれがどういうことかよくわらなかった。これからこの人類の歴史において神が何をなさろうとしているのか、多くの人々はそれを理解していなかった。まさにミステリー、奥義でした。この天使は、預言されていた内容がすべて明らかにされ、そしてそれがまさにこの地上にあって成就すると言うのです。
　神様は人類の創造から、彼らが罪を犯した後、人々の前に必ず罪のさばきがあることを警告して来られました。エデンの園でもそうでした。園の中央の木の実を食べる時、「**その時、あなたは必ず死ぬ。**」と。罪には必ず結果が伴います。そして神様は罪に対してのさばきが必ずあることを警告して来られた。そしてそのさばきがいよいよこの地上に下る時が来た。これまでは神が忍耐をもって、もちろん神の計画のうちにあるわけですけれども、延ばされて来ました。人間的に言えば。パウロたちは自分たちが生きている間にもうその日が来ると思ったのです。でももう２０００年近くたちました。神は忍耐をもってひとりでも多くの罪人がこの救いに与るように待ってくださった。でもここではもうその最後の時が来たと。

５．「ヨハネへの新たな命令」　８－１１節

　そして、８－１１節にヨハネに対する新しい命令が与えられています。「**それから、前に私が天から聞いた声**」、その声はあなたが見たことを書き留めてはならないと彼に命じた声です。その声が「**また私に話しかけて言った。『さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。』**」

と。先ほど見た「**強い御使い**」が手にしている「**開かれた巻き物**」を、「**小さな巻き物**」を受け取りなさいと命じられたわけです。９節「**それで、私は御使いのところに行って、『その小さな巻き物を下さい。』と言った。すると、彼は言った。『それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。:10 そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。』**」と。ここで何の話をしようとしているのかというと、まず「**その小さな巻き物を取って食べなさい**」の「**取って食べ**」るということばは貪り食うとか、食べ尽くすとか、がつがつ食べるという意味があります。つまりまず、神のメッセージが記されているこの「**巻き物**」、そのメッセージを自分自身が食べなさい、それをしっかりと消化しなさいと言われたのです。

神様のおことばというのは、私たちクリスチャンにとってとても甘いものです。詩篇の著者は「**あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。**」（詩篇１１９：１０３）と表現しています。どうしてこんなことを言ったかというと、愛する神様が下さったおことばは私たちにとって最もかけがえのないもので、救いに与っているクリスチャンは神のおことばが大好きであり、神のおことばをいつも学んでいたいし、神のおことばをいつも聞いていたいものだからです。みことばに全く関心がなくて、みことばなんかどうでもいいと思っていたら、注意しなければいけない。神によって救われた者たちは、神のおことばを心から愛するという新しい性質を与えられたのです。なぜならみことばは神が与えてくださったものだからです。そのみことばを読む時に私たちは神を知ることができるし、神の計画を知ることができるし、まさにそれは私たちにとって喜ばしいもの、心地よいもの、まさに甘い物です。

でもそれがなぜ食べたら腹の中で苦くなるのか――。みことばをしっかり読んで行く時にそこに記されているのは罪人に対するさばきです。もちろん我々クリスチャンにとって神のメッセージは喜びの知らせであり、私たちの希望でもあります。しかしそこに記されている、罪をさばかれるという知らせ、神に逆らい続けている者たちに対する神のさばき、我々の愛する者たちがさばかれることを考えるだけでも私たちの心は痛みます。私たちの愛する者たちが永遠の滅びに、地獄に行くことを考えるだけでも心は痛んで来ません？その話をしているのです。確かにみことばはすばらしいけれども、そこに書かれているメッセージはこの神を否定し、この神に逆らい続けている人たちにとっては恐ろしい話です。

パウロやモーセが自分の愛する人々のためだったら、喜んで自分のいのちを捨てる、自分が天国でなく地獄に行ったとしても、それで彼らが救われるのなら喜んでと。なぜ彼らがそんなふうに思ったかというと、滅びに向かっている人たちのことも彼らは愛していたから、彼らが永遠の滅びに至ることを彼らは喜んでいなかったのです。それは神様の愛です。私たちのように永遠の滅びに向かっていた者たちに神はすばらしい救いを備えてくださった。私たちの周りで永遠の滅びに向かっている人たちを見て、仕方ないよね、当然だよねと、そんな態度はみことばが教える信仰者の中にはみじんたりともなかった。彼らはその人たちのことをあわれんだのです。彼らはその人たちのことを悲しんだのです。ですから、神がそのような人たちに対するさばきを下すというメッセージは彼の心の中にあって苦かったのです。辛かったのです。苦しかったのです。

我々信仰者が考えなければいけないのは、そんな思いを持って私たちが人々と接しているかどうかです。あなたの愛する者が彼らの罪ゆえに、救いを拒み続けるゆえに永遠の地獄に向かっているという事実を知っていながら何も感じなければ、僕らの信仰自身がおかしいです。彼らが永遠の滅びに向かっているのを知っている以上、我々は何とかして彼らが滅びから救われるように祈るでしょうし、その救いの唯一の方法である救い主イエス・キリストのことを語るでしょう。ですから、この巻き物を食べるなら、ここに記されている神のメッセージをあなたが消化するならば、それはあなたの腹にとって苦いと。

最後の１１節「**そのとき、彼らは私に言った。『あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。』**」と、ここでヨハネに与えられた最後のメッセージ、最後の務めは、このすばらしい救いをすべての人々に対して伝えなさいということです。

ヨハネはパトモス島に収監されていて、自由がありませんでした。それでいて神は彼にもう一度この務めを与えるのです。だから彼は必死になって神の真理を記し、それを知らせたのです。我々もいろいろな方法を講じてなすことができます。からだが動かないかもしれない。でもだからと言ってメッセージが語れないわけではない。さまざまな方法を講じて私たちはこのすばらしい救いを語り続けて行くことができる。信仰者の皆さん、そのために私たちが救いに与り、そのために生かされていることをもう一度思い出さなければいけません。このすばらしい救いのメッセージを伝えるために神様は私たちを生かしてくださり、きょうが与えられているのです。どうぞこの１週間、その務めを覚えて、その務めを果たしてください。イエス・キリストによって与えられる完全な救いを、唯一の救いをしっかりと伝えてください。主が私たちにそのことを命じられました。今回、ヨハネはそのことを神様から命じられ、その働きを継続しました。私たちもその働きを継続すべきです。主に助けをいただきながらこの働きを

しっかりとなしていきましょう。
《考えましょう》
１．天から降りて来るもうひとりの天使について説明してください。
２．「虹」にはどのような意味がありましたか。
３．「もはや時が延ばされることはない」について説明してください。
４．「小さな巻き物を取って食べる」とはどういう意味ですか。